



大きな 物語

川崎ゆきお

大きな話より小さな話の方が増えている。小さく細かく、もうそれは本人にしか分からない話にまでなると、独り言になる。自分自身にしか役立たない、または通用しない話になる。しかし、本来、それでよいのかもしれない。

「大きな物語が消えたということですか」

「どこから」

「ですから、世の中のいろいろな方面で」

「大きな話って、何でしょうか」

「皆が関心を持っているような話ですよ」

「ありましたねえ。昔はテレビ番組なんかで、教室なんかでよく話していましたよ。昨日のあれはどうだったとか。プロレスもそうですし、野球も」

「それは小学生の頃ですか」

「そうです」

「でもテレビを見ていない子供もいたでしょ」

「いましたねえ。親が見させないとか」

「はい、勉強の邪魔になりますしね。それに塾とかに夜に行っていると、見られないですしね」

「録画で見られるのですがね」

「小学生ですからねえ、自分のテレビならいいけど」

「ああ、一家に一台しかテレビがなかった時代ですねえ」

「テレビの話じゃなく、その当時でもテレビを見ていない子供もいたってことですよ」

「いましたねえ。その話題になると付いていけないので、加わらないか、聞いているだけでしたねえ。そのものを見ないと、やはり話に加わりにくいでしょう。見た子供ばかりなので、見たことを前提にした話なので」

「皆が知っていることが、大きな話なのかどうかは分かりませんが、一番人気の番組がありましたねえ。これは子供なら絶対に見ているような」

「たとえば」

「月光仮面や、スーパーマンです」

「ふ、古すぎる」

「これはねえ、まだ家にテレビがない時代だった」

「ほう」

「だから、テレビのある家へ見に行ったのです」

「友達の家ですか」

「そうじゃなくてもいい。テレビが家にない子供が数人集まって、押し掛けるんです。あまり知らない家でもね」

「テレビにはそれだけの力があつたのですね」

「見る側もそうですが、見せる側もそうです。放送局じゃないですよ。テレビを持っている家です。これはまあ、金持ちですからねえ、自慢したいわけじゃないけど、悪い気はしなかったんでしょなあ。おやつなどもくれましたよ」

「紙芝居よりも得ですねえ」

「そうそう、電気紙芝居を見て、さらにお菓子は無料」

「お菓子だけですか」

「お茶も出ますよ。それにちょうど夕食時間帯なんですねえ。だから、カレーとか出ることもありましたよ」

「それは大きな話なんですか」

「大きくはないです。小さなブラウン管のテレビで、白黒ですよ」

「僕は生まれたときからテレビはありましたよ。ロンパールームとかよく見ていました。幼児番組です。良い子と悪い子が出てくるんです。良い子は（いこちゃん）と呼ばれ、悪い子は（悪い子ちゃん）と呼ばれていましたねえ。おやつはミルクを飲むんです」

「よく覚えていますねえ。さすがに私はその頃は幼児じゃないので、見てませんよ。家にテレビが来てからは、もうよそ様の家に押し掛けることはなくなりましたが、あれが懐かしい。その家もね、月光仮面のチャンネルに合わせて待っているんですよ」

「それで、大きな話はどうなりました」

「ああ、そういう吸引力のあるものが分散したかな、という話です。問答無用で人の家に押し掛けられたようなね」

「なるほど」

「しかし、くどいようですが、そういうものに関心のなかった子供もいたんですよ」

「何をしていたのですか。その子供は」

「勉強したり、本を読んでいたんでしょなあ」

「当時のテレビが大きな話だとすると、それに乗らなかった子もいたんですねえ」

「さあ、それは乗りたくても乗れなかったのかもしれないよ。テレビを見るなと親から言われて、素直に従っていただけとか」

「はあ」

「私はテレビが欲しいので、勉強するからテレビを買ってくれと親に言ったことがあります」

「勉強していなかったのですか」

「はい、だから成績が悪かった。テレビばかり見ていたからではありません。家にないので、ずっと見られないでしょ。それで、テレビを買ってくれたら勉強するという約束で、買ってもらいました」

「良かったですね」

「いえいえ、それは親も見たかったからでしょ」

「どこのメーカーでした」

「ああ、組立テレビですよ」

「日立ですか」

「組み立てです」

「そんなのがあったのですか」

「家電メーカーに勤めてる人が近所にいましてねえ。その兄ちゃんに組み立ててもらいましたよ」

。これで安く買えたんです」

「それで、大きな話はどうなりました」

「ああ、大きな物語をするつもりで、細かい話になってしまいましたわ」

「はい、ご苦労様」

了